

見届けること／区切りをつけること

—今後の支援の道筋を考える—



【ライオン隊よ、どこへゆく…新しい基地を求めて】

この頃、東北支援に関わっているメンバーが迷うのは、見届けること／区切りをつけることをどのように整理すればよいのかということです。

4月2日から始まった毎週末の東北支援は、モビリア避難所の子ども支援に始まり、陸前高田の学校支援、石巻の子ども支援と、徐々にその範囲を広げながらも「意味ある支援」を模索しながら継続してきました。私たちなりの支援の中で特徴的だったのは、①毎週、直接顔をあわせて行う支援であること、②組織的に、多くの人に関わりながら成り立っている支援であること、③教育に限定した支援であること…などだと思っています。

確かに毎週末の支援は、その準備にしても、体力の面でも、資金の面でも厳しいものでした。特に支援から帰ってきた次の日の月曜日は、重い体を気合いでむち打ちながら、それぞれの仕事をやっとなり越えるという状態でした。それでも、私たちの支援を応援してくれている人々に後押しをされ、そしてなによりも、がれきの中で待っている人や子どもたちがいることに思いを馳せて、週末の深夜、東北道をひた走るのでした。支援のNPOで混雑しているかとも思える時期でも、「支援する側の都合にあわせた支援ではなく、あくまでも支援される側のニーズに私たちは丁寧に応えよう」を合い言葉に模索を続けてきました。ですから、今回の支援も、台風が心配されながらも、「行く」ことに誰も疑いを持つメンバーはいませんでした。

秋の空に変わり始めた被災地は、がれきの1次撤去がほぼ終わり、避難所の多くが仮設への入居によって閉じられています。すたんどばいみーが支援するモビリア避難所も閉所しました。石巻でも、いままでよく見かけたNPOの姿をあまり見かけなくなりました。それぞれの地域では、避難所の閉鎖が一つの区切りとなっているように思えます。そして、ちょっとした「静けさ」が訪れているのですが、その静けさに不安を感じることもあります。

「9月いっぱい派遣が決まっています」と聞いていた神奈川県から派遣されていた職員の方の姿は、今回万石浦中学校にはありませんでした。でも、避難所にはまだ20名以上の家族が残っています。市の非常勤職員の方と、避難所の自治組織で今後の対応をするそうです。ひっそりとしている避難所には、区切りを迎える安心感ではなく、次のステップへの不安感を感じさせます。神奈川県職の担当者がいなくなったことで、今まで使わせていただいていた万石浦中学校は使わせていただけなくなりました。支援に入るスタートで、神奈川の県職の方が中学校に交渉してくれて教室を貸してくれることになった経過があり、県職が引き上げた今、学校は使用できなくなったのです。そのことを知らなかったため、今回の支援は「場所」をめぐる混乱もありました。

土曜日は、万石浦中学校に何とか頼み込んで、部活で来ていた先生の教室をお借りすることができました。今までと違って2階の教室です。子どもたちは珍しさと、私たちとの2週間ぶりの再会ということもあって、走り回って、かくれんぼに興じていました。

とてもじゃないけど、やっとなり越した場所を「静かに使う」なんて無理なことです。それでも、チーム分けをして全員で野球をやることもできました。振り返りも落ち着いてできました。みんなで取り組むことも、一人で取り組みことも、本当に上手になりました。

そんな子どもたちに、避難所で生活する人たちはお昼ご飯を出してくれました。「人が少なくなつて、どうせ余っちゃうんだから」といって進めてくれたのです。いまでも生活をしている人がいながらも、閉鎖に向けて区切りをつけた神奈川県と中学校。一方で、まだ顔を見せている私たちに対しての暖かなまなざし。「夏休みまで」は私たちにとっても、当初支援の区切りの目安でした。しかし、回数は減っても支援の延長に取り組む私たちは、やはりどこか「見届けること」にこだわっているのです。その「見届け方」がどのような形になるのか、そこが今一番の悩みどころです。そんなことから、今回からは、「修学旅行」の先に進むことを求めて、子どもの数だけ支援者を集めての大人数での活動にしました。

日曜日は、避難所運営に当たっている市職の長井さんの好意で、長井さんが管理する仮設の集会所をお借りできました。中学校と集会所そばのコンビニに集合して移動。集会所は畳敷きで10畳ほどの広さ。散歩がてら、外遊びができる場所を求めてずいぶん歩きましたが、どの公園も仮設が建ったり、手入れがされていないために使えない状態だったり。結局あきらめて集会所にUターン。集会所で勉強したりボール遊びをしていると、仮設にすむ子どもたちが覗きます。声をかけると、何人かは一緒に入ってきて、お昼のおにぎり作りも一緒にやりました。

そんな頃に、活動場所の相談に市役所に行った支援隊のメンバーから、吉報が届きました。「万石浦小のそばの仮設の集会場を使っている。そこは独立した集会場で、しかも広い。」子どもたちに伝えると、「知ってる、知ってる！ボロコだ！」と叫びます。「ボロコって?」「ぼろぼろの古い公園だったんだ。」おにぎり食べて、早速移動。

広い、広い、立派な集会場。ガスコンロも二つついて、トイレも二つ。お風呂まであります。子どもたちも大興奮して、浴槽に入って隠れてみたり、集会室を走り回ったり楽しそう。しばらくは使ってもいいということで、集会所で必要な掃除機や時計、水回りの用具を購入して寄贈。これでライオン隊の新しい基地ができました。

子どもたちが教えてくれた近くの公園は、みんなで遊ぶのにちょうどほどよい広さ。マンションと仮設住宅に囲まれているため、気兼ねしながらみんなで野球をしていると、ここでも仮設から出てきた子どもが参加。通りがかった子どもたちも離れたところから見学しています。避難所が閉鎖されて一区切りがついても、子どもたちの居場所はあまりなさそうです。仮設住宅や元の家に戻った子どもたちが、それぞれの地域や家庭で居場所を見つけて少し落ち着くまで、私たちはライオン隊を見届けていきたいと思えます。



【陸前高田の支援の今後】

8月の陸前高田の支援も、なかなか難しいものでした。ひとつは、すたんどばいみーのモビリア仮設地区での子ども支援がどうなるかということが、なかなか見えてこなかったことにあります。すたんどばいみーにとっても自分たちの住む地区を離れて行った初めての支援活動で、区切りをつけること／見届けること、それをめぐって内部でいろいろな議論があったようです。そうした中で、9月10日の1日をかけて、かかわった子どもたちや大人たちとミニイベントをすることが決まりました。

もうひとつは、学校支援の拠点を地域につくるための枠組みづくりを模索し始めたことによるものです。簡単に言えば、陸前高田にEd.ベンチャーのような団体をつくる可能性を探り始めたということです。これまでは、私たちが出向いてニーズを探って対応をしてきましたが、今後は、新しく立ち上げる団体と私たちが連携しながら活動を継続していくという見届けかたをしようと考え始めたわけです。しかし、Ed.ベンチャーとて前身は10年ほど前に始まった小さな学習会ですから、簡単なことではありません。ですから、とりあえずは、窓口担当者を決めて助成金で雇用し、学校のニーズを調査してもらうことから始めて行こうという道筋を現在も模索中です。

【福島県富岡町学校再開支援】

8月4日、Ed.ベンチャー事務局に、「富岡町教育委員会事務局」と名乗る方から電話があり、「学校を再開することになったので物資の支援をしていただけないか」という要請がありました。「富岡町」と言えば、原発がある避難指定区域。その地域の学校が学校を再開するとは、どのということか？いつ？どこに？通う子どもはいるのか？そして、なぜ今なのか？などなど、疑問はつきませんでした。そこで、「物資の提供は、一度様子をみせていただいてから」と提案させていただいたところ、「再開前は忙しく、対応が難しい」とのことです。8月10日の学校立ち上げ説明会への参加以後は、連絡がないままになっておりました。が…8月25日の再び電話があり、9月1日、福島県三春町での学校再開が決まり、「保健室の物資提供をお願いしたい」という依頼が正式にありました。

9月5日、学校再開後の学校を訪問しました。工場跡地の学校再開場所は、どこからみても工場そのものでした。加えて、町内にあった小中あわせて4校、そして町立の幼稚園が一緒になっての再開。そして、震災前の5%の子どもたちでの再開なのだそうです。学校再開は、今後、その地域に戻れるか／戻れないかの試金石になっているようです。また、学校再開の決定にも、行きつ戻りつの議論があったことがうかがえました。さらに、私たちの窓口になっておられる小野先生、そして、校長先生、養護の先生、それぞれが、双葉町、三陸町、富岡町がご自宅だそうで、ご自身も被災したり、避難生活をする中で学校再開であることもわかりました。そして、物資提供を依頼された保健室は、まだ見る影もない姿でした。「何とか、保健室らしく」そんな先生方の願いを形にするお手伝いをすることにしました。

Ed.ベンチャーの震災支援を担当する者たちは「脱原発」という路線を明確にしているので、今回の支援活動を進めるかどうかは当然議論になりました。「するか／しない



か」という議論のなかで決着したのは、「知るための支援／責任をもち続けるための支援」という枠組みです。これまでの支援活動を通して、マスコミを通して伝わる被災地情報のほとんどは、どこかしら「かわいそう／がんばる」という文脈にあるような気がします。しかし、私たちが本当に知りたいことは、何が起きていて、そこにどのような議論があり、そして、その議論の中でどういう決着がつこうとしているのかということであるような気がします。そうした事実レベルに基づいた情報こそが、被災していない者たちの想像力を豊かにすると同時に、それらを通して議論に加わる可能性をひらいていくようにも思います。

【支援隊活動記録 8月22日～9月6日】

■陸前高田支援 ※すたんどばいみーの子ども支援のまとめは次号に掲載します。

○8月29日～30日（第20回）ジャパンプラットホームの理科室再興プロジェクトモニタリング、モビリア仮設住宅の子ども支援（すたんどばいみー）、気仙小学校支援（瀧の里仮設住宅集会所の机・椅子の貸与・撤収・新品購入）

□支援隊メンバー：清水睦美（東京理科大学）

すたんどばいみー：チューブサラーン・宮脇英理

□物資提供（地元業者経由）：広田中学校（紙11箱・朱肉詰替用3本、金額35,064円）、小友小学校（ラジカセ6台、金額48,000円）、気仙小学校（机・椅子、金額370,000円）

■石巻市万石浦の子ども支援

○9月3日～4日（第14回）万石浦ライオン学校の9月活動

□支援隊メンバー：松永雅文（大和市特別支援教室）、家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、清水睦美（東京理科大学）、柿本隆夫・福島良彦（引地台中学校）、下新原なつみ・吉間里依（大野原小学校）、今井美里・甘利悠貴・大林沙紀・古浦新司・谷口友梨（東京理科大学学生）、村田仁美（和光大学学生）、保坂克洋（立教大学院生）、目代貴啓（日本大学学生）

□物資提供：万石サポートセンター（掃除機2台・掛け時計・水回り用品・トイレ用品）

■富岡町学校再開支援

○8月10日（第1回）富岡町学校立ち上げ説明会参加（郡山市ビックパレット）

○9月5日（第2回）富岡町学校再開のニーズ調査（三春町、曙ブレーキ工場跡地）

□支援隊メンバー：清水睦美（東京理科大学）、家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、内藤順子（大野原小学校）、日下田岳史（東京大学院生）

■ご協力いただいたみなさま（敬称略、順不同、物資・寄付を含む）8/22～9/6

松永雅文（大和市特別支援教室）、ボンナ・マカラ（Ed.ベンチャー日本語教室有志）、西館健吾（引地台中学校）、倉島千恵

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援（Ed.ベンチャーヒガシニホンダイシンサイエン）

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

